

篠田有史（写真）・工藤律子（文）

『伊達侍と世界をゆく「慶長遣欧使節」とめぐる旅』

（河北新報出版センター、2014年）

評者 坂東 省次

2013年6月から2014年7月までの1年は「日本スペイン交流400年記念の年」とされ、スペインと日本の両国でさまざまな記念行事が開催されてきた。

交流400年の日本サイドの名誉総裁は皇太子殿下であり、昨年5月にスペインを訪問され、開会式に参列されたほか、ガリシアを訪れ、巡礼の道を歩かれている。

交流400年の閉会式は日本でスペインサイドの名誉総裁である皇太子殿下のご臨席の下での開催が予定されていたが、フェリーペ皇太子がフェリーペ6世国王に即位された理由から来日が延期となった。

今回の交流400年を迎えてこの1年間、じつに数多くの記念イベントが開催されたことは言うまでもないことであるが、そんな中でも慶長遣欧使節関係の本がスペインでもまた日本でも刊行されたことは意義深いことである。とくに交流400年が幕を閉じようとする去る6月16日に刊行された標記の『伊達侍と世界をゆく「慶長遣欧使節」とめぐる旅』は慶長遣欧使節の専門書ではないが、使節の存在を改めて世に広く紹介する上でタイムリーな1冊であろう。

日本とスペインの交流は1549年に来日したスペインの宣教師フランシスコ・ザビエルから始まり、1584年には天正遣欧使節がスペインを訪れているが、交流400年は1613年の慶長遣欧使節の日本出発に基づいている。仙台藩祖伊達政宗の命を受けて支倉常長以下約30名が宮城県石巻を出て太平洋を渡り、メキシコ、キューバ、スペイン、フランス、イタリアを訪問して帰国している。

天正遣欧使節のヨーロッパ訪問は各地で大歓迎された。それ故に、歴史的快挙とも言われる。しかしながら、慶長遣欧使節の方はすでに日本でキリシタン弾圧が強まる時代の中でヨーロッパを訪問したが故に、悲劇の使節として帰

国を余儀なくされた。使節はなぜそのような状況のなかでヨーロッパに向けて旅したのか、謎の多い使節である。

本書は写真家の篠田とジャーナリストの工藤が、侍たちが異国の地で何を見て、何を思ったのか、400年の時を超えて一行の足跡をたどった1冊である。侍たちが訪れた先々でとった数々のカラー写真と名文で綴ったラテン世界は、本書を一級の紀行書としている。

紀行書であるが、無論、史実に基づいて書かれていることは言うまでもない。本書では、「使節の計画には、貿易で国を富ませるだけでなく、天下取りの夢も入っていたかもしれない」と述べているように、使節の究極の目的を、政宗の天下取りと考えているように思われる。

スペインは南部セビリアにコリア・デル・リオという町がある。この町はセビリアで万国博が開催された1992年あたりから、ジャーナリズムの間で注目されるようになった。

ここには、ハボン（スペイン語で日本のこと）という姓の人が700人も住んでいるからだ。しかも彼らは帰国せずこの地に残ったとされる慶長の侍たちの末裔というのである。

多くの学者がそれを証明しようと挑戦してきた。しかしまだ憶測の域を出ないことも確かである。本書の「エピローグ」によれば、日本の研究者たちがついにハボンさんの血液を採取して、DNA鑑定を始めたというのである。

「もし結果が、侍の末裔ではない、と出たらどうしますか？」との問いに、ハボンさんたちは「どんな結果が出て、私たちの日本への思いは変わりません」と応えているという。

慶長使節の侍たちが残した信頼の絆は、人類の誇りではないだろうか。

ばんどう しょうじ（教授・日西交流史）